

満州引揚げ

母の話と私の労苦体験

埼玉県 高橋 仁 子

私は、満州国東安省鶏寧県で、終戦当時五歳でしたので、その時の状況を説明したり、記録することは余りにも幼い記憶ですのでとても出来ないのをごさいます。

ただ、父や母が時々話をしてくれる内容を聞くたびに、ああ、そうだった、こうであったと幼ながらの思い出が浮かんでくるのが、父や母の話題と符号するのをごさいます。そうした父や母の話題が何よりのよりどころであることが、私の場合であると思ひまして、ここにその部分を引用させていただくことにいたします。

昭和二十年八月、ソ満国境の鶏寧県に住んでいたとき、ソ連が一方的に日本に宣戦を布告して、鶏寧県境

を越えて侵攻してきたので、鶏寧県長の命令で、婦女子と老人は鶏寧駅から、南方へと強制疎開が始まりました。父は、公務の関係で鶏寧に残り、父と別れを惜しみながら一歳半になったばかりの弟と母と三人で官舎をたちました。

母は大きなリュックサックを背負い、前に弟をしっかり抱きつけて、右、左の肩から、非常食料、水筒等を提げ、私も小さいリュックサックを背負い、水筒を提げ母の手を、しっかりと握りしめ、きびしい母の顔を見ながら一生懸命歩みだしました。

官舎から駅まで約一キロぐらいの暗闇の中を足早に小走りで歩きました。道路の沿線には満州人の暴動化直前の様子であったと聞いて、とてもこわかったり驚いたりしていました。駅の前の広場には町の日本人が幾千人も集まってごったかえしていました。

その際、脳裏に焼き付いてはなれないのは、
一、真っ暗がりの駅前の広場に群がる民衆の頭上に、ものすごい爆音がひびいた後に、白昼のように明るくまぶしくなって、ただただ、母の手をしっかりつかま

えて逃げまどろばかりでした。そしてそのあとに空から激しい雨のような銃撃がありました。何人死んだかわかりませんが、悲鳴、怒号の混乱の巷となり、生き地獄そのままの悲しい思いをした家族が大勢出たようでした。

二、いよいよ乗車です。どれくらいの間時間がすぎたかわかりませんが常に石炭を積んで走る屋根の無い貨車でした。それでもみんな我先に飛び乗る人でごった返しその混雑はすさまじいものがありました。私たちはとても乗れそうになく困り果てておりました。その時鶏寧街の商人である若い満州人二人が私たちを抱えて乗車させてくれた。時たま私たちの官舎を訪ねてくれたことのある青年二人が泣きながら見送ってくれたのが、私には生涯忘れられないご恩であります。

母は今もこの話をする時、眼に涙して感謝しております。無蓋貨車は真っ暗で超満員であり私は母の腕にすがるのが精一杯で背中のリュックサックをおろす場所さえありません。そのうち、ソ連機から、たびたび銃撃をうけ、その度にたくさんの負傷者や死者が出て

走る貨車の中で死骸を抱きついて泣き叫ぶ悲しい声が闇の中から聞こえる。本当に生きた心地はしなかった。

一夜あけて朝になったら、次々に用便をする子供がでて貨車は走りっぱなしなので、そのしぶきをうけても逃げ場もなく親も、子もみなつらいとか苦ししいなどというものではなかった体験でした。おそらく昼ころだったと思いますが牡丹江駅に着いたようでした。一晩中、少しも緊張から解放されず、すっかり疲れ果てておりました。

一人の日本人の方が来て私たち一行を、省長官舎という立派な官舎に連れて行って下さいました。割り当てていただいた部屋の日本間の畳の上に座った時は私も母もリュックサックをしばらく振り下ろして生き返ったような、ホッと安心してしまつて母の胸に抱きついてしまいました。

その時母は私と弟をいきなり、つき放し、一安心してはいけません。お父さんは鶏寧で日本軍に協力して、とつても大へんなお仕事をなさつて大変だろうと思ひます。こんな立派なお部屋に入れていただいたけど、

ここは命令があれば直ぐ出発することになるのです。だから決して安心してはいけません。」とききっぱり話しました。

牡丹江の滞在はごく短期間、そのあいだ、次々に連続の爆撃で街の中は大騒動のようだった。近くで火災が発生したり、官舎に怪我をした人や死んだ人を運んだり、上を下への大さわぎ、そのうち死んだ人をまとめてどこかに運んだり、負傷者を病院に連れて行ったり、みんなの泣き叫ぶ声にただただ茫然としてました。

たしかその晩に、父がひょっこり私たちを尋ねて来てくれた。びっくりして夢ではないかと驚き、しばらくは喜ぶことも出来なかったほどでした。ひげをぼうぼう生やした父は、「すまん、すまん、みんな元氣だなー」と言っって母の肩をしっかりとつかんで、にっこりしていた。

私は「お父さん」と叫んで父の胸に飛びこんで喜んだのは忘れられない。弟は父の顔をみて、びっくりして泣き出していた。まだ一歳そこそこの赤ん坊には無

理もないほど、父の顔の変わりようでありました。

それから、親子四人が固まって父の話聞いた。

父はお役所の人であり、身勝手なことではない。

今まで鶏寧で日本軍に協力してきたが、鶏寧街の日本人の住宅や建物はほとんど焼失して、多くの自殺者を出した。哈達河の貝沼団長始め開拓団全員が自殺した悲しい知らせを受けた。軍司令部は「日本人全員を南下させよ」と命令を出したので、軍と別れて、父も牡丹江まで来て駅の司令部に行き、はじめて私たちの居場所がわかったとのこと。

父は「みんなと会えてうれしいな！ 牡丹江はまだ日本軍隊の規律を守っているから安心だ、やがて又ここから移動するだろう。ここは、東安省管内の役所の家族だから、指揮者にしたがって、どんどん南下しなさい。お父さんはあなた方と一緒にいたいけど、勝手な行動はできない、ここから間もなく駅の司令部に戻るから、お母さんの言う事を、よく守って行くんだよ、わかったね」と言っって、私と弟を高々と抱きあげて、「二人とも良い子だね、お母さんの言うことをよくき

いて、立派な人になってちょうだいね」とほほずりをしてくれました。弟はようやくお父さんとわかったのか、抱き上げられて大喜びのようでした。

父はすぐ、身支度を始めたので、私は「お父さん、帰っては駄目」と必死になって父の脚もとを力の限りしっかりと抱えて泣いて離さなかった。今、思い出しても涙の出でくる思いが致します。

「仁子！はなしなさい」との、母のきつい言葉をきいて泣き伏してしまったのでした。これも生涯忘れられない悲しい親子の別離のひとつでありました。

父にむかって母は「子供の事は心配しないで下さい。役所のお仕事をどうかしっかりとやって下さい」とけなげにも父に対する母の願いの言葉でありました。

父は母に、母は父に深くと頭をさげあって父を送る母の姿、私は今も時々思い返しております。

父の胸中、母の胸にも、この時がこの世の別れと想ったことでしょう。

その翌日私たちに出発の指示がありました。母は又リュックサックを背負い、弟を前におんぶし、私も早

速リュックサックを背負い、水筒を提げて身支度をととのえ、母の腕にしっかりとつかまって、右往左往、ごったかえしの牡丹江駅にたどり着いた。父は牡丹江駅のどこかにいるかと思つて雑踏の中をさがし回ったけどもう父の姿は見えなかった。

出発！の合図。一人小さなおにぎり一個の配給を受けて、やはり無蓋の貨車に、みんなわれ先にと急いで乗車する。お互いに助け合うこともなく、幼い子も老人にも病人にも、おかまいなしで、その浅ましい様は全く腹立たしく情けない限りだった。ややしばらく焼け付くように暑い無蓋の貨車はそのまま動かず、ようやくハルビンに向かつて走りました。

母はホッとしたように先ほどのおにぎりを、出して私に二個、弟に一個分けてくれました。

私は、お母さんも食べてと一個差し出したら、今お腹が空いてないから心配しないで食べなさい、と断ったのでした。多分母は私たちにだけ食べさせて済ましたことが幾度もあったのではなかったかと思われてなりません。

この貨車は時々停車してなかなか動きません。停車するたびに近くの農民らしい大勢の満州人が凶器を手にし、貨車のそばに来て、少ししか持っていない私たちの衣類や食べものを奪って逃げ去るのだった。そうしたかっぱらいの満州人に抵抗は絶対するな、と指揮者から注意をされているので私たちは悔しいけど何度もうくりかえし、略奪されましたが残念だけど我慢しておりました。

母も幾度も品物を取られ、何がしかのお金を与えていた。悔しそうな母の顔や眼は今も思い出されます。ハルビン駅に着いた時は、ほとんど着たきり雀になったと言って悔しがったり、怒ったり、泣いたりしていた人が随分おりました。

ハルビン駅には、マンドリンのような鉄砲を持ったソ連兵がたくさんいたので不安でとっても恐ろしかったのを覚えています。

そうした中で腕章を付けた日本人から指示と案内をしてもらって駅から列を組んで歩き、方々に分散されたようでした。私たちは、東安省の職員家族がまと

まって小学校の校舎に落ち着いた。泊まる場所は講堂でコンクリートの上でした。私たちはこのコンクリートの上にうすいゴザを敷いてごろ寝をするのでした。とても体が痛くて眠られず、小さい子供は泣き止まず、みんなぐずぐず不平不満だったようでした。長い長い眠れぬ夜が明けて、少し明るくなったころ、日本語の出来る道案内の朝鮮人と、マンドリン銃を持ったソ連の兵隊が来て、お金か、品物が欲しいのか、銃を母たちにつきつけて、おどしておりました。ズドン！と一発うたれれば死んでしまうだろうと思うと肝がつぶれそうでした。とても筆に表わすことは出来ません。

母は髪をふりみだして病人の真似をするのが、とても上手でした。

ハルビンの街は夜を日について耳につんざく銃声や聞こえ、恐ろしい思い出ばかりでした。ハルビンは危険だから新京に行こうとの相談になったらしく明日は南に向かって出発の準備をするようにとのことでした。ハルビンには二晩泊まりました。ただ、鶏寧から

ずっと一緒に南下した島田先生の奥さんは小さいお子さんが病弱だったので無蓋の貨車では無理だったのでしょうか。止むなくハルビンにとどまりました。おぼさんと母はそれこそ泣き泣きのとつてもつらい悲しい別れだったようです。

ハルビン駅は大勢の日本人が集まってその、混雑ぶりは大変なものでした。その中に入った私たちは、すっかり母につかまって、ただ男の人の指揮を受けて動きまわっておりました。構内には人間と思われないような汚れた顔、ぼろぼろの着物、南京袋を身にかけて、まるで乞食同様、これが日本人かと、全く目を覆う姿の日本人が病人のように寝ころんでいるのをおれば、また気がぬけたような力のない姿で何かを食べている者もありました。また泣きながらなぐりあいなどしている人もおりほんとに驚くばかりでした。

私たちは長い間、待たされましたが、団体を指揮している人のおかげでようやく乗車出来たようでした。

やはり無蓋貨車、他の人に助けて貰い貨車にまゐるで石炭のように積まれ、座ったらく動くことも出来ない、

文字通り満載でした。それでもみんな新京に行けると、とっても喜んでおりました。けれど母は大分疲れた様子でやつれた母の顔に私は気が付いたものの、どうすることも出来ません。

鶏寧を出発して以来、食べ物も私と弟にばかり与えて、母はあまり食べもせずにはいたからではないかと、私は母に申し訳なく、悪かったとしみじみ思いました。私はこれからはお互いに自分の分だけ食べることにしようと思いました。けれど母はいつも、私たちに食べなさいと勧めてくれるので、弟は、時々母の分まで食べてしまうことがありました。それでも母は、いつもにこにこして団体一行の指揮者と相談して事を進めていたようでしたので、子供心にも母をたのもしく誇りに感じておりました。

いよいよ新京に着いた。しばらくしたら父の知人の武重さんの案内で合宿所に落ち着いた。

そこはどこかの会社の独身寮で、その人はみんな南方に逃げたとかで空になっていたんだそうです。有り難いことになると畳の室がいくつもあって、押し入

れには布団も入っていて、みんな大喜び、畳だけでももったいないのに、布団まで敷いて、なんだか、パチがあたるのではないかと思うほど、有り難かったのを覚えております。

武重おじさんは、母に向かって「ソ満国境の鷄寧から二人の子供を生かして新京まで連れて来られたことは偉い、偉い」肩をたたいてほめ讃えられた。

母は父の動静をたずねていたけど皆目見当がつかない様子で、武重おじさんは、「あの結城大人は心配ない！満州人に守られて、元気でそのうち必ずあなた方をさがして帰って来る」などと言って、母を慰めておられた。もう一人の父の友人の菅さんは、結城おやじさんは、必ず元気で帰って来ます。奥さん、心配ない、これから中国軍と八路军が必ず大喧嘩をするから、今晚だけここに泊まって早く南方に移動することだ。」と言って下さった。菅さんの話は命令口調だったようでした。

そうしているうち、武重おじさんは、おにぎり三個とたくあんを、あたたかいうち召し上がれと持ってきて

てくれました。食べ物の有り難いことを身にしてみたい私たちは大喜びでお礼を申し上げ心から感謝申し上げている最中に弟は、三つのおにぎりを全部食べてしまつて、にこにここと大満足した顔をしていました。その当時の私としてはとても重大な出来ごとだったので。今も思い出して独りほくそ笑むことも、度々あるのです。母は致し方なく、私に、こんどいただいたら仁ちゃんには二つ上げるから、かんべんね、と言つてくれました。

母は子供の私と弟を生かすために、身も心も粉にしていたのでしよう。私と弟の犠牲になつて栄養失調になつていたに相違ない。ほんとうに母は強い、強かつた。本当に偉かつた、と私は今にして心服しております。

一休みしてから母と弟と三人でちよつと街に出ました。何か食べ物をさがした様子でしたが、思うようなものがないらしくお芋と豆腐を見つけて買って来て、お鍋をさがして煮てくれました。戸棚の食器も見付けてそれこそしばらく振りであたたかいうち馳走を食べた

時は、とても幸せで涙が出るくらいうれしく、特に母は私にいっぱい食べなさい、とおなかいっぱい食べさせて下さいました。

母も元氣を出して水道の水が出るから急いで洗濯をするからと、いそいそしておりました。私も弟の面倒をみたりして手伝いました。久しぶりでやわらかい布団の上に寝て、あまりのうれしさに眠れないほどでした。翌朝、武重おじさんが来て、「一日も早く奉天に行った方が安全だからすぐ出発しよう」とのことです、急いで準備して私たち団体は武重おじさんに連れられて新京駅まで歩き、心からの御礼を申し上げて何回も何回も別れをおしみ、手を振って別れました。

私はなんだかあまりにも幸せだったので、夢のように奉天に行ったらどんなことになるのかと、武重おじさんと別れるのがとっても、心細い思いが致しました。

武重さんは父と仲のよい友人だったらしく、とてもよくお世話して下さいました。すっかり私の名前も覚えて、ひろちゃん！お父さんは元氣で帰ってくるから、お母さんの言うことをよくきいて、よい子にして待ってい

なさい、と言って下さった。今もおぼろげながら記憶に残っている人でございます。

たび重なる貨車の旅にも慣れて、色々の苦勞をのり越えながらようやく奉天駅に着きましたがなかなか貨車から降ろしてくれません。物すごく暑い太陽が、カンカン照り付けるし、みんなも我慢出来なくなり、早く降ろせ、早く降ろせ、とさわいでおりました。

随分長い間待たされてから全員駅のホームに降ろされました。母はいきなり日本軍の、将校らしい人とすごいけんまくで言い争いをしているのです。私は驚いて母のたもとにすがり泣くよりほかにありませんでした。

母は涙を流して、顔をしかめて、軍人さんを問いつめている様子でした。

その軍人さんも、顔中の涙をにぎりこぶしでぬぐいながら、一生懸命にそして丁寧な言い訳をしているようでした。私は何がなんだかわかりませんでした。後日、母から聞いた話によりますと、私たちが着いて間もなく、「日本国天皇から重大放送と、終戦のご聖

断」を聞いた母は、とてもとてもなんとも、言い表せない気持ちになっていったときに、丁度、将校らしい軍人と会ったので、いきなり胸ぐらをつかんで、「戦争は日本が負けたとは本当か、なんで負けたのか、私たち婦女子は立ち退けとの命令に従って、ここまで来るのにどれだけの難儀をしたか、私たちは主人を国境の鶏寧に残して日本軍に協力して来たのも戦に勝利するようにとそればかりを願ってだったのに！」と夢中で激怒して問いつめていたとのことでした。

将校も、勝手に戦争を止めたのではない。しかし、一たん聖断が下った以上は、戦争を止めねばならない。軍律はきびしいものだ。

私は間もなく、ソ連の捕虜となって、シベリアに送られる身であります。などと一生懸命、母に説明していたとのことでした。

この日が、昭和二十年八月十五日でありました。

奉天駅前の広場は、南下してきた日本人が黒山のようにむらがって騒然としていた。私たち一行はどこに落ち着くのかさっぱりわからず、ロータリーの木陰に

たむろしていた。

奥地から避難して来たと思われる日本人の乞食同然の人々、なんの希望もない、やるせない、自暴自棄、疲労困憊、だれかれかまわず罵りあって傷つき、子供も大人も泣きわめき、人間の生きざまとはとても思えない様相でありました。幼児を連れた婦人は、食べ物に困ってか満州人に物をねだっている。全く哀れと言うのか、悪夢と言うのか、今も母から思い出して話を聞きたびごとに、私がよびおこす記憶の、その哀れな姿は、すなわち私たちの姿も同様であつたらうと思ひ、ぞっといたします。

やがて指揮者の案内で、この雑踏からはなれて、日本人奉天居留民団の二階に連れてもらいました。大きい部屋の中、真ん中に日の丸の旗がかかげられてあったのを見つ、ハッと我にかえり、母と一緒に思わず最敬礼をしたのを思い出します。子供心にもすごく感動したのでしょうか。部屋はとても沈んだ空気で、みんな悔しい顔をしている。中には気が狂ったように、とんきょうな声を出したり、机に頭をすりつけて、両手

でかかえて泣いていたりでびっくりしました。

それは思いがけず日本敗戦の報を聞いたので、悲泣限りない大きな衝撃であったのでしょう。

そこから私たちは高野山というお寺に連れていってもらい、大きな畳の室を当てて頂きました。とってもきれいな部屋で、有り難いことだと感謝したり、ホッとしたり致しました。

夕方になったら、ここ奉天に居住しておられる日本人の仏教婦人会の方々から一人一個ずつのおにぎりとたくあん漬を頂いて、そのご厚意にみんな蘇生したように、いきいきとなりました。私たち親子三人と鈴木さんというおばさんと四人に畳二枚が割り当てられて、長々と足をのばして休むことが出来たのもしばらく振りのようでした。

翌朝、仏教婦人会の方がまたおにぎりと梅干を持って来て下さいました。見ず知らずの私たち一行にたまわった温かいご恩は、とても忘れられません。私は決して人様から受けたご恩は忘れてはいけないと、今も胸中に大切に仕舞いこんでおります。

そのうち、お坊さんは広い座敷に一行を集めてお話をして下さいました。有り難いお話だったようで、みんな手を合わせて、うなずきながら聴いておりました。

そのお話の中にはこんなことがありました。「この御み堂の中にいつかは必ずソ連兵が入ってくるから、入って来たら私の話をきいた通りに行動して下さい。そうすれば心配はいりません。私が仏壇の前で鉢をたたいてお経をあげたら、ソ連兵が来た合図です。女の方々は急いで台所の真ん中の穴蔵に入ること。ここは漬物や味噌を入れる倉庫であるが、広い地下壕であるから、五、六十人の女の人は入れます。男の方は蓋をしめる。そしてその上に、布団を敷いて病人と子供をねかせて下さい。その他の男性は、子供をしっかりと抱いて、足でも、お尻でも、ひねってなるべく大きな声で泣かせるのです。そして子供がさわがしく泣いたらだれか一人立ち上がって、大声を張り上げて子供は泣くんでない、泣くな、泣くな、ソ連の兵隊さんは何も悪いことはしない、泣くな、泣くな、ソ連の兵隊さんは何も悪いことはしない。ソ連の兵隊さんは何も悪いことはしない。とこれを何回も繰り返して、繰り返して声をはり

上げることです。私は大きな声でお経をあげ続けます。ソ連兵が引き返すまでお経を続けます。」

この話の内容は、母からも鈴木のおばさんからも聞かされているので私の記憶と符号するのでございます。

二、三日して、案に違わず、お坊さんのお話の通り、ソ連兵が何回も侵入してきました。その際は必ずお金か品物を強奪して行きました。ある時、地下壕に入りそこねた娘さんが、ソ連兵に連れて行かれて翌日帰された悲しいことがあったそうです。

母も一度逃げおくれたときは、頭の髪をふりみだし、弟をしっかり抱きしめて鬼のような恐ろしい、狂った形相をして難をまぬがれたそうです。また鈴木のおばさんもある時、地下壕に入りそこねてソ連兵にひきずられた時、私はおばさんに必死になってつかまり大声で泣きわめいて抵抗したので、ソ連兵はあきらめてしまったことがあります。鈴木のおばさんは私のことを「命の恩人」と言っていて大事にしてくれました。

今でこそ、思い出して笑い話にもなりますがソ連兵への憎しみ、恨みはますます根深くなって、消え去ら

ないのです。

奉天の市内も相変わらず、日夜を問わず、鉄砲を撃つ音のない日はなく、危険な中を、婦人会の方々が毎日運んでくれたおむすびも、とぎれがちとなり、母は鈴木のおばさんと一緒に、自立生活をすることにしました。

お寺のお坊さんにも婦人会の方々にも、心からお礼を申し上げて日本人の住宅街に移動致しました。高野山の生活は有り難いけど、いつまでも続くわけではなく、各自、身よりのある人は自立生活をするように相談されていたようです。母は奉天に知人はあまりなく、後で聞いた話によると、東洋綿花会社の社宅とかで、二階建てのきれいな住宅でした。

ここでは母も冬を迎える覚悟をして、鈴木のおばさんと共同して、煙草や菓子など仕入れて、箱に並べてそれを紐で首からつり下げ街頭で、声をふりしほって「お菓子ー、タバコー」と売り歩いたのです。

慣れない仕事ながら毎日出かけました。私は弟のめんどろをみながら、お留守番をしておりました。弟が

私の言うことをどうしても聞き入れない時や泣き止まない時は「ソ連兵」が来るよ、と言えばすぐおとなしくなったことを思い出します。

一日中で一番楽しみな夕飯を済ませた後、いつも母とお婆さんはお菓子と煙草を売ったお金の計算をして、鈴木のお婆さんは「今日も仁ちゃんのお母さんに負け」と言って、笑っていたのが印象に残っています。

この住宅街は男子の自治自衛会をつくって、危険防止をされていたとか、とても有り難いことでした。けれど夜警している時に、何人かの日本人が殺される事件のあった日は、敗戦のはじめさには、四十人くらい生活しておりましたが男の大人は五人でした。

そうしたある寒い日、お父さんが私たちの部屋を訪ねて来たのです。それこそびっくり。髪ぼうぼう、顔はよごれたまま、着ているものもボロボロ、全く乞食同然で部屋の入口に立っているのです。母と私はすぐ父だとわかりましたが、弟はふるえて母にしがみつき離れません。

父は、「お父さんだよ」おいで、おいで、と言っ

から、もぎとるようにして抱きあげたら、火のついたように泣き出しました。母が笑って手をさしのべたところがるように母のふとこころに戻ってけろりと泣き止んだことも覚えております。

父は髭面の口から、「やっぱりお母さんは一番強いなあー。」と笑って部屋の真ん中に座った。この情景を話すときの母は、今も涙ぐむのです。よもや、この世で会うとは夢だに思っていなかったのでしょうか。それだけに強烈な感激であったに違いありません。

父は「仁子！こんどはどこにも行かないよ。お父さんの役所は無くなったのだから、みんなと一緒に日本に帰るばかりだ。お母さんを良く手伝ってくれて有り難う。坊やも大きくなったな、男だ。強くなれよ、と弟の頭を撫でまわしてくれた。私は父をこの時ほど力強く思ったことはなかったし、今だにあの時の父の顔も言葉も覚えております。

その後、父の知人で奉天街で食堂を経営していられる、近藤さんのお世話で、青葉町のキリスト教会の地内に小さな住宅をさがしていただき、そこに移住致し

ました。

父と母は満州語が出来たので、よくジャングイ（親方）と言う人が訪ねて来ました。又農民が穀物を荷車で運んで来ては、父の指示で日本人と取り引きしていたようでした。

母は満州人から肉や野菜を仕入れて、夜仕事に、コロッケをたくさん造り、父は早起きして、そのコロッケを街の朝市に売りに出していました。母はコロッケ造りが上手だったので、よく売れたそうで、私たちの口にはなかなか入りませんでした。

ここで昭和二十年を送り、二十一年の正月を迎えました。そして四月に私は、この教会の青葉小学校に入学しました。

七月になったら日矯事務所から「日本引揚げ日程」が示されたとのことで、誰も彼もてんでこ舞いして喜び合いました。

教会では、私たちのためにお別れ会をして下さり、牧師さんご夫婦のダンスに、和夫お兄ちゃんと雪子お姉ちゃんの讚美歌はあまりにも素晴らしく今なお、私

の目に耳に残っております。平野先生、本当に有り難うございました。引揚港のコロ島まで、いろいろな難儀なことがありましたが、大きな汽船に大勢の引揚者が乗り込みました。甲板上からは父の発声で、「満州よさようなら！」と叫びみんな泣き泣き手を振っておりました。この大勢の人がみな日本人だと思つと何かほつとしました。

八月九日祖国日本の宇品港に上陸しました。ああようやく生きて祖国の土を踏むことが出来た！。腕章を付けた若い方々、肩章をかけた婦人の方々から「ご苦労さま、お帰りなさい、お疲れさまでした」などの言葉を耳にしては、嬉しさ、悲しさ、こもごも交じった思いで、言い知れぬあんど共に涙がどつと落ちる感じでした。

宇品の休憩所で、父は休むひまもなく、東京や山形に電話で連絡をしていたようでしたが、一緒に引揚げて来た方々とお別れのあいさつを交わし、別れを惜しみながら、方々に四散したのであります。

私たちは東京の品川にある、引揚者宿泊所に行つて

休息させて頂きました。常に何事も、父と一緒になので母も私も、安心して父について歩くだけでした。夕方になったら親戚の方々が、色々のご馳走や果物などたくさん持ってきて下さいました。私は夢かとばかり驚いて、なんだかもったいなくてすぐ食べる気持ちにはなれませんでした。そしてその晩は父の弟と母の妹のお宅にそれぞれ別れて泊めて頂きました。翌日は新しいきれいな着物や洋服に着替えて、山形に出発致しました。

上野を発って幾時間過ぎたのか父が「着いた、着いた」と大きな声で眠っていた私を揺り起こして汽車の窓を指しました。両親は、故里の山、河、部落を眺めて深刻な顔で泣いていました。さぞ、こもごもの感情が、思い出が去来して、おさえきれない涙だったのでしようといふにして私もあの時の情景を思い返すのでございます。

郷里の楯岡駅に下車、父と母の両家の親類、友人たちが大勢出迎えに来てくれました。みなうれし涙にくしゃくしゃの顔での対面でございました。

父の生家に到着、まず仏壇の前に座って、ご先祖様におまいりしてから、祖父母を始め兄弟や、楯岡駅から一緒に来てくれた大勢の方々にごあいさつして父は、どんなにほっとしたでしょう。

すぐお祝いの準備も出来大にぎわいでありました。郷里には一週間ほど滞在しましたが、その間、母の生家に行ったりでなかなか忙しい日を送ったようでした。

やがて父は上京することに決まり、私と弟は母の実家の祖父と祖母に預かってもらうことに決まったようで「一年経ったら必ず迎えに来ます。よろしくお願います。」と言って父と母は、代わる代わるだっこして上京してしまいました。

私は、祖父母の深い、温かい愛情に包まれて、富本村湯野沢小学校一年の二学期に転入させていただき、平和な生活の中でお友達も出来まして楽しい毎日を送り、弟は祖母の背中におんぶされて、にこにこ何ひとつ不自由なく、すくすく育ったのであります。

【執筆者の横顔】

仁子さんは、昭和十四年、満州国吉林市で生まれ、同二十年八月、東安省鶏寧県で終戦に遇った。日本敗戦のみじめさ、特にソ満国境地だったのでその惨状を子供心で悲しんだ。

官吏であった父親は、日本軍に協力のため一人鶏寧に残留したので、母親と子供二人は鶏寧から南下し、奉天（瀋陽）に避難した。

その間、ソ連軍からの爆撃、飲まず食わずの日もあり、現地人の暴動にあらなど生きた心地ではなかった。神仏の助けか三か月後に奇しくも奉天で父親とめぐり会えた。夢かと驚き、感激し、あんどした。親子四人はここ奉天で越冬し、翌二十一年四月、仁子さんは、奉天市青葉小学校に入学した。そして同年七月、コロ島から運よく日本に引き揚げる事が出来た。

神奈川県相模原市で五年間を過ごしたが、やがて父親は故郷山形県に戻り、山形県議、村山市長に就任した。その間仁子さんは、小学校を五校も転々と移動せねばならなかった。父親がある時、中学校の運動会に

行ってみると、グラウンドの中央の指揮台に立ち応援団長として大勢の生徒を指揮しているのがなんと仁子であった。いや子供は案外たくましいものだど笑って語ってくれたことがあった。高校から東京家政大学を卒業し、千代田生命本社勤務となった。

今、五十四歳の明朗活達な主婦、三人の子女を成人させたこのごろ、自宅で学習塾を開き、又は健康スポーツのリーダーとしても、幅広く楽しんでる。なかなか親切で世話好きな性格の彼女は地区の人々からとても慕われているのはうれしき限りである。

（元拓務省囑託

満州開拓担当 岡本 雅生）

終戦の確認

東京都 阿久津 英雄

午後の陽射しを浴びながらだらだら坂を背たけほどの青葉をかきわけて前進すると、突然青葉の間から水